

## 2019 年度(令和元年度)人間科学部卒業研究優秀賞の報告書要旨を掲載するにあたって

2019 年度(令和元年度)から 4 年次の卒業研究は、専門ゼミナールから独立した 2 単位と位置づけられ、主査と副査の審査に基づく総合点によって評価されることとなりました。

更に、両学科においては、それぞれ独自に設けた、「該当者なしも厭わず」の強い姿勢を示す審査基準および審査方法によって、優秀論文が下記のごとく、厳正に選定されました。

こども学科では、提出された 62 名分の報告書について主査と副査が互いに評価の偏りを少なくするため、学習到達度を示す評価基準の観点と尺度からなるループリックを用いて評価しました。その結果、持ち点<sup>主査 60 点</sup><sub>副査 40 点</sub>の合計 95 点以上、かつ、両者から推薦のあった 6 名が選考対象としてノミネートされました。この 6 名について、更に、当該主査を除く専門を異にする教員 5 名（うち学科外 2 名）が選考委員として査読し、A か B かで評価しました。その結果、A の数が多かった次の上位 2 名が、最優秀賞および優秀賞として選ばれました。

最優秀賞 316561 山田 早紀

小学校・算数科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する「教師の手立て」の研究

優秀賞 316523 斉藤 綾乃

子どもに人気のある科学絵本のデザイン的特徴

スポーツ学科では、提出された 73 名分の報告書（<sup>ティーチング部門 27 名、コーチング部門 28 名、マネジメント部門 18 名</sup>）について、各ゼミによる一次選考、卒業研究ワーキンググループによる二次選考、学科全教員の投票によるファイナルの三段階方式によって、それぞれ<sup>ティーチング部門 1 名、コーチング部門 2 名、マネジメント部門 1 名</sup>を選出した上で、次の 4 名の中から更なる投票によって最優秀賞 1 名が選ばれました。報告書の提出後に副査から査読に基づいた修正意見書が提出され、当該学生はその意見を真摯に受け止め誠実に回答、可能な限り改善するという、審査する側とされる側で双方向に意思の疎通も図られました。

最優秀賞 316005 安藤 諒 【コーチング部門】

トランポリン競技の各種ジャンプ動作における筋活動の比較

優秀賞 316012 大野木 遥 【コーチング部門】

大学生体操競技選手の段違い平行棒種目における後方車輪技のキネマティクスの研究

優秀賞 316035 高木 香織 【ティーチング部門】

教員養成段階における「体育授業」に対する意識の検討

優秀賞 316034 須戸 菜月 【マネジメント部門】

プロスポーツが地域に与える経済的価値評価ー石川県での検討ー

人間科学部も創設から 10 年以上となり、高等教育機関として、卒業研究によって主体的に学び、混沌とした世界を逞しく生き抜く創造的な人材を育成する使命があると考えます。

そこで、先輩から後輩へと卒業研究のバトンがリレーされることを願って、今後は、翌年度の紀要巻 1 号に前年度の優秀賞の報告書要旨を掲載していくことにしました。

2020 年 9 月 20 日

卒業研究委員会代表 馬場 治  
学部紀要編集委員長

## 小学校・算数科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する「教師の手立て」の研究

316561 山田早紀

指導教員 芥川元喜

### 1 研究の目的

小学生の子どもの手元には算数科の教科書があり、毎日の時間割の中に算数科の授業がある。新学習指導要領では、授業において、「どのように学ぶか」が初めて提言され、「主体的・対話的で深い学び」とした授業改善を行うことが求められている。これを実現していくには、教師が子どもの興味・関心を引き出し、子どもが学ぶ楽しさを実感する必要があると考える。

しかし、教育実習や教員採用試験の模擬授業の経験から、算数科は教科書に示された問題があり、それを用いて授業を展開すると、子どもの主体性に結びつけるのがとても難しいと感じた。そこを研究の原点として、小学校教諭を目指す者として、「主体的・対話的で深い学び」のある算数科の授業を行っていくために、これを実現する「教師の手立て」について明らかにしたいと考えた。具体的には、子どもの主体性や対話を生み出す言葉がけや発問、動作、教材に着目し、深い学びを実感させるには教師としてどのようなことができるのか、授業研究を通して考察していく。

### 2 研究の方法

文献研究によって、算数科における「主体的・対話的で深い学び」を実現する教師の具体的な手立てについて考察する。また、実際に小学校で行われた「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した算数科の研究授業を観察し記録する。授業記録の方法としては、授業リフレクション研究を参考にしている。観察し記録した授業の授業研究を行い、授業内容を発話プロトコルにおこし、授業分析する。対象は小学校2年生、5年生、6年生の算数科の研究授業である。「主体的・対話的で深い学び」を引き出す教師の言葉がけや発問、動作、教材を抽出する。場面抽出においては、筆者、大学研究者、大学4年生、複数人で場面認定を行い、主観的にならないよう、研究的エビデンスを保証した。また、明らかにしていく過程においては、研究授業後の研究会での授業者の発言も取り入れ、分析、考察する。

### 3 研究の結果

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業を展開していくには、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」それぞれを授業のどの場面に取り入れていくのかを教材研究を通して授業デザインを練ることが重要である。また、算数科においては、特に新しい見方・考え方を子どもが自ら発見するという事に留意する必要がある。また、明らかになった教師の具体的な手立てを活用していくには、日ごろからの学級経営で「安心・安全な学級」をつくりあげていくことが不可欠である。「安心・安全な学級」の中で、教師自身が算数科を楽しみ、全員参加を意識した授業デザインを考え、学び続けることが、子どもにとっての「主体的・対話的で深い学び」につながると考える。

### 4 今後に向けて

本研究を通して、算数科における「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、教師による「指導的な手立て」を多く必要とすることが明らかになった。しかし、授業経験がまだ少ない筆者にとって、いきなり実践していくのは難しい。そのため、教科書を見て丁寧に教材研究を行い、指導書を参考にして「型」をしっかりと定着させていきたい。その上で、本研究において明らかになった教師の手立てについて、工夫し、実態に合わせて取り入れていきたいと考える。

また、今回授業研究を行った単元は、様々な考えが生まれる授業であったが、他の単元には、教えるだけ、覚えるだけというものもあり、子どもの主体性を育んだり、自分の力で新しい見方・考え方を発見させたりすることが難しいこともある。しかし、そのような単元であっても、教師が楽しむ気持ちを忘れず、「主体的・対話的で深い学び」を意識して指導していく必要がある。教師として教壇に立つ際には、学び続ける教師として研鑽を積み、本研究で明らかになった具体的な教師の手立てを活用し、どの授業にも「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を、日々工夫して取り入れることを意識して授業デザインしていくことが重要である。

## 子どもに人気のある科学絵本のデザイン的特徴

316523 齊藤 綾乃

指導教員 永坂 正夫

### 1 研究の目的

科学絵本は幼年期の科学教育を充実するための手立てとして注目を集めており（瀧川，2006；滝川，2010）、子どもの自然に関する間接経験を補償したり、具体的な直接経験を補強したりするために有意義なものである。金子・北野（2010）の研究では、園において9割近い保育者が毎日1冊以上の絵本を読み聞かせていることが明らかにされており、また小学校においても学校図書として科学絵本に触れる機会がある。それらのなかで子どもが科学絵本を読むことで、絵本を通して科学に触れるきっかけを得ることができる考える。

そこで、数多くある科学絵本の中で、人気となっている（長年にわたり販売されている、現場の先生方がよく使用している）科学絵本を分析・調査し、科学教育のきっかけとなる科学絵本にはどのような特徴があるのかを明らかにすることで、科学絵本を活用した教育方法やよりよい科学絵本の選択、また教材製作への応用のための基礎的知見が得られると考えた。

### 2 研究の方法

まず、現在販売されている科学絵本はどのような分野のものがあるのかを、書店・図書館・検索サイトを使って調べ、さらに実際に科学絵本を読むことで確認した。また、ロングセラー・ミリオンセラーの絵本を文献で調べ、保育士を対象に、保育所で使用している科学絵本・今まで良いと思った科学絵本は何かをアンケート調査し、分析対象とする人気のある科学絵本25冊を決めた。そして、25冊の科学絵本を読み「内容」「文字・言葉」「絵」の3観点について分析を行った。「内容」は対象年齢と5つの科学絵本の分類、分野の3項目で、「文字・言葉」は、本文の総文字数、使用されている言葉（抽象的か具体的か）、擬音語や擬態語の使用度、文と絵の調和について、「絵」は、写真、リアルな絵、イラスト的な絵、色づかいについて、以上それぞれ4項目とした。「文字・言葉」と「絵」は1から5の5段階のスケール（1を当てはまる要素小、5を当てはまる要素大とする）を用いた。

### 3 研究の結果

現在販売されている科学絵本のうち、動物・植物を扱っているものが全体の約70%を占めていることが分かり、動植物分野に大きく偏っていることが明らかとなった。また、人気のある科学絵本のデザイン的特徴として、全体としては、「具体的・直接的な言葉が使用されていること」、「写真ではなく、イラスト的、リアルな絵が使用されていること」、「文章と絵が一致し調和していること」が明らかになった。さらに、対象の25冊の科学絵本を「内容」「文字・言葉」「絵」の3観点で分析したところ、対象年齢の違いによって異なるデザインの特徴がみられた。1・2歳児対象は「単純で簡潔な言葉で、リアルな絵の要素が強く、めくる要素をうまく取り入れていること」、3・4歳児対象は「科学的な内容を、ストーリーを通して取り扱っていること」、5歳児以上対象は「理科の専門的な用語を使用しながら、より科学的な内容が解説的になっていること」という特徴が明らかになった。

### 4 今後の課題

本研究は人気のある科学絵本を抽出してそれらの特徴をみつけたが、人気のある科学絵本として対象にならなかった科学絵本と、本研究で明らかになった人気のある科学絵本のデザイン的特徴を比較することでより明確に「人気のある科学絵本」のデザイン的特徴がみられるのではないかと考える。また、今回の調査・分析は筆者自身で行ったものであるが、子どもに読んでどう感じたかどこが良かったのかなど意見を聞くことで、実際に子どもの意見を反映した子どもの視点からのデザインの特徴が明らかになるのではないかと考える。

## トランポリン競技の各種ジャンプ動作における筋活動の比較

316005 安藤 諒  
指導教員 奥田 鉄人

### 1 緒言

トランポリン競技は選手が10種目の異なる技を連続し評価される採点競技である。採点は演技点(Eスコア)、難度点(Dスコア)、跳躍時間点(Tスコア)、移動点(Hスコア)から構成される。その中でも、跳躍時間点は浮いている時間がそのまま点数に反映され、大きな得点源である。トランポリンの踏切時における体幹および下肢筋群の活動と跳躍時間との関係、関節角度の変化に着目し、各種ジャンプ(ストレートジャンプ、アクションジャンプ、1Back\_Brani)の踏切動作の特性を明らかにし、比較することで、一致点・相違点を見つけることを目的とした。

### 2 対象と方法

被験者は、トランポリン競技大会に出場している男性3名の熟練者(年齢 $20.3 \pm 1.7$ 歳、身長 $168.5 \pm 3.0$ cm、体重 $61.5 \pm 4.5$ kg、競技歴 $16 \pm 4$ 年)とした。トランポリン上で立位静止状態から予備跳躍を開始し、被験者が最高跳躍高に達したと感じたところからストレートジャンプを9本連続で行い9本すべてのジャンプを記録した。アクションジャンプ・1Back\_Barani(1回宙返りの連続)も同様に筋電波形を無線の筋電測定器を用い測定した。対象筋は、左右の腹直筋、内腹斜筋、外腹斜筋、脊柱起立筋、多裂筋、左側の大殿筋、大腿直筋、大腿二頭筋、前脛骨筋、腓腹筋の計15筋であり、測定手順については、筋電センサーを体表に貼り付け等尺性随意最大収縮を測定した後に、各試技を行った。等尺性随意最大収縮の測定については、MMT法で測定を行った。データの処理については、着床前(500ms)～着床、着床～最下点、最下点～離床の3つのフェーズに分け、各フェーズでの平均を出しその数値をグラフ化することでデータの処理を行った。関節角度の変化については、ハイスピードカメラで撮影した映像を用い、着床、最下点、離床時の3局面で膝関節と足関節の関節角度をみた。

### 3 結果

各種ジャンプにおいて、跳躍時間と筋活動の実効値となるRMS値との相関をみた。RMS値とは、信号の大きさの測り方のひとつで、時間とともに変化する信号の実効的な大きさを示す値。被験者3名がともに相関傾向、または相関を示したものは、跳ね上がり局面の大腿二頭筋のみであった。各被験者で特徴的な点は、被験者Aでは、アクションジャンプの沈み込み時に左腹直筋に正の相関を認めた。被験者Bでは、ストレートジャンプにおいて負の相関が全局面合わせて5つ認めた。被験者Cでは、ストレートジャンプの全局面において、左外腹斜筋に正の相関を認めた。しかし、個人間で見ても各種ジャンプ間に一致点は見つからなかった。次に関節角度の変化をみた。膝関節は、着床から最下点、離床にかけて終始、伸展していた。足関節は着床時に底屈、最下点では背屈、離床時は底屈を示した。

### 4 考察

跳躍時間とRMS値との相関から跳躍時間点を上げるための考察を行った。ストレートジャンプの跳ね上がり局面において大腿二頭筋に3名ともに正の相関傾向、または正の相関があり、股関節伸展を強調した踏切動作であることが推測される。また、関節角度の変化と筋活動を見ると、最下点で足関節は背屈しているが、沈み込み局面で腓腹筋に大きい反応を示しトランポリンの反発に耐えながら沈み込みを行っていることが推測される。個人の癖や跳躍時間点をあげるためのフィードバックとして映像分析とEMGを用いることは有効的であると考えられる。

### 5 結語

本論文では、体幹ならびに下肢筋群の観察を行い跳躍時間とRMS値との相関について考察を行った。個人間で見ると差がみられる結果となり、個人の癖や跳び方の特徴が見られた。跳躍時間への相関について跳ね上がり局面に大腿二頭筋の活動が影響していることが考えられる。個人によって負の相関が出ているところは、体幹軸の歪みによりトランポリンの沈み込みが浅くなり、跳躍時間が下がる要因として考えられる。



## 大学生体操競技選手の段違い平行棒種目における後方車輪技のキネマティクスの研究

316012 大野木遥

指導教員 島田一志

### 1. 緒言

段違い平行棒における理想的な後方車輪は「バー上の倒立から一周する運動局面のすべての局面において姿勢欠点がないこと」、「上昇局面においてスピードが鈍ることなく伸腕でさばかれていること」とされ、とくに「上昇局面での腰の反りは後方車輪に続くひねり技への発展を難しくさせるため、そののない実施が重要となってくる」と言われている。したがって、後方車輪中の体幹にそりが生じる選手の動作を動作中の局面ごとと比較および検討することは、後方車輪の持つ力学的な特徴を明らかにし、指導のための基礎的な知見を得るという観点から有意義であると言える。

本研究の目的は、画像分析法を用いて段違い平行棒における後方車輪を分析し、体幹のそりが生じない選手と生じる選手の動作の相違についてキネマティクスの観点から検討を行うことである。

### 2. 研究方法

本研究における分析対象者は、第69回西日本学生体操選手権大会の体操競技の部に出場した女子選手73名であった。なお、そりなし群に分類される選手は27名、そりあり群に分類される選手が10名、分析対象外に分類される選手は35名であった。

演技中の後方車輪のうち、前後にひねりをとまなう技を行っていないものを分析の対象とした。また、演技中に対象となる後方車輪を何度も行っている場合は、分析者の主観によりその選手の最も良かった試技を分析の対象試技とした。さらに、対象試技のうち公益財団法人日本体操協会の公認審判員3名に減点のある実施と減点のない実施に判断をしてもらった。それにより、減点の無い試技を分析の対象試技とした。

試技の撮影には高速度カメラ(JVC社製, GC-LJ25B2)を用い撮影速度60fpsで撮影を行った。

### 3. 結果および考察

あふり局面における股関節角度の平均はそりなし群とそりあり群でそれぞれ屈曲方向に29.1°および16.7°を示しており、以下ではそれぞれの平均値に近い分析対象者2と分析対象者33をとりあげ、検証することとする。

体軸の回転角度において、抜き局面では局面を通じて分析対象者2の方が小さな角度を示していた。また、あふり局面の前半では、分析対象者2の方が大きな角度を示していた。このように、後方車輪中の体軸の変化パターンが異なることから、両者の後方車輪には動作の相違があることが示唆される。

分析対象者2の抜き局面における肩および股関節の変化は、いずれも伸展方向に変化していることがわかる。これらのことから、分析対象者2は抜き局面において、あふり局面で股関節を屈曲方向に変化させる力を生み出すための十分な「そり」の姿勢を作っていることが考えられる。

これに対し分析対象者33は、肩関節角度が伸展方向に変化するタイミングは分析対象者2と同じであるのに対し、股関節角度の伸展方向に変化するタイミングは分析対象者2より遅く、さらに抜き局面中では伸展の角度となっていなかった。これらのことから、分析対象者33はあふり局面で股関節を屈曲方向に変化させるための姿勢を作り出せないために、代償動作として肩角度を大きく屈曲させることで体軸を回転させ、これによって後方車輪を行っていることが考えられる。

以上のことから、分析対象者2は抜き局面における十分な「そり」の姿勢を作り、これを利用してあふり局面で体軸を回転させて後方車輪を行うのに対し、分析対象者33はあふり局面において肩関節角度を大きく屈曲させることで後方車輪を行っていることが示唆される。

したがって、後方車輪のあふり局面においてそりのない動作を行うためには抜き局面において十分な「そり」の姿勢を作ることが必要であると示唆される。

## 教員養成段階における「体育授業」に対する意識の検討

—小学校教員を目指す学生を対象に—

316035 高木香織

指導教員 櫻井貴志

### 1. 緒言

文部科学省では、「体育は、すべての子どもたちが、生涯にわたって運動やスポーツに親しむのに必要な素養と健康・安全に生きていくのに必要な身体能力、知識などを身に付けることをねらいとするものである。」と述べられているが、子どもの体力問題等は改善されていないことが現状である。そこで運動の機会を平等に与えることの出来る「体育」は重要な役割を担っているのではないかと考える。その指導をする教師の力量は必要不可欠なものであり、また教師自身が体育の「楽しさ」を感じ、興味・関心を持つことで、子どもにも体育の楽しさを伝え、「体育嫌い」な子どもを減少させることが出来るのではないか。それが結果的に生涯にわたって運動に親しむ態度を身に付けることになる。しかし、一般的に小学校は学級担任制であり、清水・塩原ら(2019)<sup>5)</sup>の研究では「体育」において指導の苦手意識が見られた。同様に、KS大学小学校教員養成段階の学生においても実技を苦手とする学生が見られたことから本研究では小学校教員養成段階における学生の「体育授業」に対する意識を次3点から明らかにすることを目的とした。(1)「体育授業」を重要だと認識しているのか。(2)「よい体育授業」の内容についての認識。(3)学生が「体育授業」をする上で必要な能力の実態。

### 2. 方法

本研究では、KS大学小学校教員養成課程の「体育科基礎」を受講した2年生と3年生を対象にアンケート調査を行い、アンケート項目は体育の苦手意識や、指導の意識等に関する項目で作成した。

### 3. 結果及び考察

全ての学生が「体育」を重要だと認識していることが明らかとなったが、これは小学校の科目として設置されていることから当然の反応であるように考える。しかし、子どもの体力等に対して問題意識がない者や「体育授業」をすることへの自信がない者がほとんどであり、授業で実践する機会が少ないことが考えられる。また、「よい体育授業」に関しては知識としては習得されていない傾向にあったが、授業を構成する上で感覚的に意識していることが明らかとなった。「基礎的条件」と「内容的条件」の両方によって「よい体育授業」が構成されているため、授業以外でも積極的に習得する姿勢を持ち続けることが必要であると考え。そして、「体育授業」をする上で必要な能力として学生が有しているものは、「仲間との協力」「運動の楽しさ」を教えられる力であり、「体育」に関する知識・理解や児童への指導の仕方に関しての能力は乏しいように感じた。「運動の楽しさ」を教えられるとしても、できないことが体育嫌いをつくる要因となることから、知識・理解を深め「教授法」を身に付けていかなければならないと考える。

### 4. 結論

今回対象とした小学校教員養成段階学生へのアンケート調査から、すべての学生が「体育」を重要だと考えていることが明らかとなったが、社会的な子どもの体力等の問題意識がない学生もあり、運動の好き・嫌い、得意・不得意に関わらず体育授業をすることへの自信がない者が多く見られた。次に「よい体育授業」には、全員が参加でき楽しい授業というイメージが多く持たれていることが明らかになった。しかし、「基礎的条件」と「内容的条件」の両方を確実に認識している者は少なく、感覚的な能力として授業を構成していこうとする意識が垣間見えた。そして体育授業をするうえで必要な能力として、「仲間との協力」「運動の楽しさ」を教えられるとする者は多く、児童に指導する際に必要であるような「教授法」等の体育知識が欠けているようであった。このような現状を改善するためには、まず教師自身が「体育」に興味・関心を向け、子ども達が生涯にわたってスポーツに親しむ態度を身に付けさせる意義を理解し、学び続ける姿勢を身に付けていくべきである。

## プロスポーツが地域に与える経済的価値評価

### -石川県での検討-

316034 須戸菜月

指導教員 岩岡研典

#### 1 研究の目的

本研究の目的は、プロスポーツチームが地域にもたらす影響を検討した上で、石川県のプロスポーツチームの経済的価値を明らかにすることである。プロスポーツチームの経済的価値を明らかにすることで、今後の石川県のスポーツ界全体のソフト面・ハード面への投資を促すための検討を行う。

#### 2 方法

2019年11月16日(日)に開催された「第一回スポーツかなざわ祭」において、石川県在住の18歳以上(2001年4月1日以前生まれ)の個人を対象にアンケート調査を行った。本研究では、スポーツへの関心の高い集団を対象とした。アンケート調査の項目の中に、仮想的市場評価法(CVM)を用いた項目を設けプロスポーツチームへの支払意思の評価を推定した。支払意思の推定を用いて総評価額を算出し、回答者属性との要因分析も行った。また、金沢市民サッカー場改修計画・金沢アリーナに関する質問項目も設けた。

#### 3 結果と考察

プロスポーツチームの価値を評価する支払意思額(WTP)の値は、1人あたり平均値4,922円、中央値1,890円という結果となった。これは、日本で一番大きな市場規模を持つNPBの球団を対象とした研究での結果と遜色ない結果となり、石川県のプロスポーツチームの経済的価値は低くはないことがわかった。また、推定されたWTPを用いて総評価額(TWTP)を算出した。石川県におけるプロスポーツチームのTWTPは中央値を用いて算出した場合は1年あたり56.4億円、中央値を用いて算出した場合は1年あたり21.6億円と推計された。

WTP 要因分析については、性別では女性より男性の方が支払意思は有意に高く、スタジアム観戦日数(年)と石川県のプロスポーツチームの合計応援年数でも観戦日数・合計応援年数が多い人ほど支払意思が有意に高かった。

金沢市民サッカー場改修計画・金沢アリーナ構想に対する質問には、計画・構想の認知度を問うと「知らなかった」との回答が全体の59%、「知っていた」との回答が41%であった。計画・構想の賛否を問うと「賛成」が22%、「どちらかといえば賛成」が42%、「どちらでもない」が29%、「どちらかといえば反対」が6%という回答となった。また、回答理由を問うと、「賛成・どちらかといえば賛成」と回答した人は「石川県のスポーツ界が盛り上がるから」に76票と最も多く、次いで「子供達に希望を与えるから」に50票、「スポーツ以外のイベントに期待しているから」に40票となった。「どちらかといえば反対」と回答した人では「現存のスポーツ施設があるから」に7票、次いで「収益化できないと思うから」に6票となった。これらから、スタジアム計画・アリーナ構想の認知度は低いものの、スタジアム・アリーナに期待する声は多いことがわかる。一方で、スポーツ以外のイベントへの期待が高く、収益化への疑問から現存のスポーツ施設とは違う機能や魅力を備えたスタジアム・アリーナが求められている。

#### 5 結論

本研究では、石川県におけるプロスポーツチームの経済的価値を調査した。調査対象をスポーツへの関心が高い層としたが、地域に根ざしたチームを目指すプロスポーツの価値評価を行うことは、プロスポーツチームを取り巻くハード面での投資についての期待や、ソフト面での課題を明らかにすることができた。プロスポーツチームにとって地域や自治体は重要なステークホルダーであると言われており、本研究で得られた結果は、今後の石川県内の地域や自治体にとってプロスポーツチームの重要性をあらわすものとなり得る。本研究で明らかにしたプロスポーツチームの地域における経済的価値や、スタジアム計画・アリーナ構想への期待をもとに、実際の計画や構想がより良い方向に進展することが望まれる。

